

女子大國文 第百六十七号 令和二年九月三十日

翻刻 京都女子大学図書館所蔵

『「社寺縁起由来」』 収載一枚刷略縁起二十点

中 前 正 志

最近の拙稿「京都女子大学図書館所蔵『「社寺縁起由来」』目録稿——卷子装略縁起集に綴った旅日記——」（『国文論藻』第十九号、令和二年三月。千葉郁恵との共著。以下、「前稿」）において、目録を作成するなどした『「社寺縁起由来」』が収載する略縁起六十二点全ての写真を付載しておいた（冊子体である四点については表紙の写真のみ。それら以外は一枚物）。絵を中心としたものが多くを占めていたからである。そして、その写真によって、記載された文字も概ね判読し得るであろうと予測していた。しかしながら、中前の撮影技術の稚拙さなどのため、刊行後に確認したところ、ほとんど判読不能であったりかなり判読しづらかったりする場合が少なからず見られた。そこで、その点の不備を補完するために、『「社寺縁起由来」』が収載する一枚刷の略縁起のうち、未翻刻かと見られるもの二十点について、その本文の翻刻を試みるのが、本稿である。なお、書込の類は、前稿にて特に注目し全て翻刻済みであるので、本稿において重ねての翻刻掲載は行わない。

本稿に翻刻を掲載するのは、次の二十点である。それぞれの書誌情報などは、前稿参照。番号は、所蔵者の京都女子大学図書館によって付されたものである。他にも、例えば3奥州金華山畧縁起も翻刻対象とすべきところであろうが、摩滅などによって状態が相当に悪くなっているため、残念ながら対象から外さざるを得なかった。

1 小石川白山境内旗楼之由来／2 「明王山宝仙寺略縁起」／4 牛石池之図／5 牛石池之図／8 天拝一光三尊如来縁起／12 摂州布引山瀧勝寺畧縁起／14 石山寺由来畧縁起／15 摂州有馬湯元温泉寺薬師如来畧縁起／21 「播磨明石柿本人丸神社境内盲杖楼図」／23 「月輪寺時雨桜の図」／24 人丸山船形之梅の記／32 高砂社相生松畧記／33 播州高砂尾上相生古松之由来／38 高砂尾上神社相生霊松真図／39 高砂尾上相生古松之由来／42 播磨国曾禰霊松の由来／48 播磨国石宝殿畧記／50 臥龍松之図／53 「高野山両部曼荼羅由来」／54 「源長寺由来」

翻刻に当たっては、基本的に、通行字体に改めるとともに、句読点等を適宜施した。ただし、もともと句点が付されている32と53については、その句点のみ施した。□は、判読できなかった文字（箇所）である。翻刻してはいても、特に振り仮名は見えにくい場合が少なくなく、誤読を含んでいる可能性が低くない。15は、兵庫県立歴史博物館などに断簡が所蔵される温泉寺の縁起絵巻を「本縁起」としたものかと見られて注意されるが、印刷の不鮮明が甚だしく、振り仮名の翻刻自体諦めざるを得なかった。また、4 5 8 12 14 15 32 33 39 42 53 54の場合、行送りはおままとし、それら以外は、追いつみにして行末を／で示した。4と5、33と39はほとんど同文であって、それぞれ上下対照の形にして翻刻した。

なお、24 人丸山船形之梅の記について、早稲田大学古典籍データベースに写真が掲載されていることを前稿に注記しておいたが、国立国会図書館データベースにも写真が掲載されている。いずれも本文は同文だが、版は異なるようである。24の末尾にある「赤石人丸山／月照寺」が、早稲田大学本には無く、国会図書館本では「勅願所／赤石人丸

山別当／月照寺」となっている。右の二十点のうちには、確認不足のため、すでに翻刻のあるものを含んでしまっているかもしれないが、その場合でも、この24のように異版などが種々存することが少なくなかるうから、少なくとも『社寺縁起由来』がどの版を収載しているのかを示すことになって、全く無意味ということにはなるまい。

1 小石川白山境内旗桜之由来

小石川白山境内旗桜之由来

人皇五十六代清和天皇第六の皇子／貞純親王の御子六孫王経基公／五代孫鎮守府將軍 源 頼義朝臣の／御嫡男八幡太郎／義家朝臣、奥州／貞任・宗任の／一類謀逆の／とき、誅伐の／討手をかう／むり、永保三／亥のとし／二月下旬、京／都を進発、／御下向ありしに、／此所におゐて異賊／群集りて道を／妨くるとき、義家朝臣／空ゆく雁の連のみだるゝを／御覧じて不審おぼしめし、／従士をめされ、あれ見給ひ。／雁の連を乱し飛行は、／不思議なり。正しく此辺に／伏兵して道路をさまたくものあらむ。汝、はやくも此桜の／梢にはたをたてゝ士卒に下知して、／異賊を退治し給へよとおほせありしかは、／従士かしこまりたてまつりて、たゞちに異賊をうちはたし退治し給ふ。すなはち、此さくららの老木也。／義家朝臣御帰陣の御とき、此地江八幡宮をくはんじやうありしよりこのかた、世々の／將軍尊崇したまひ、靈現いちしるく、又、さくら木も年歴経るのうち、たび／枯朽果て／見苦しき様あれとも、源家御盛んなるときは、朽果たる根株よりかならず枝葉生ひ／しげりて、今にいたるまで葩の匂ひより姿様旗に似たるものゝ出るも、また不思議なり。／神霊のなさしめ給ふ所ならむか故、江戸砂子名所図会などに書あらはしぬ。世に／おしなへてはたさくらといふ。

2 「明王山宝仙寺略縁起」

略縁起

抑当山第一の什物井の頭池の蛇骨は、／寛永十六年夏の頃、草刈牧童等／井のかしら池の辺にて鎌をとぎ休／息する折からに、蛇来て牧夫の足を／なめんとす。牧童があやしみて、研たる／鎌をもつて雄蛇の首を切落す。池俄に／鳴動し、雌蛇怒て甲州の方へ退去る。／是より井の頭の水ことごとくかれて一滴も／なし。東都水道つきる事久し。仍而諸人／官家三訴ふ。当山方室秀雄江被仰付加／持法力を以、右蛇を呼返せば、如元水涌出る。／依之蛇骨当山江納るもの也。／

天保十三壬寅四月十五日改

武州多摩郡／中野郷／明王山宝仙寺

4 牛石池之図

うしいいけのつ
牛石池之図

そもく
抑牛石の由来を

たつぬ
尋るに、往昔塩竈

の神、食塩を始めて

口い
製し人民に施し

5 牛石池之図

うしいいけのつ
牛石池之図

そもく
抑牛石の由来を尋るに、往

かしほかま
昔塩竈の神、食塩を始めて

せい しんみん
製し人民に施し玉へる時、

つかわしめたる一牛、今に

玉へる時、つかわしめ

玉ふ牛、今に

化して石と

成、是を信する

家には瘟疫を

入れず、人の手足の

煩を除き、牛馬の

病を愈すと云々。

奥州一宮塩竈御釜町

化して石となり、是を信

する家には瘟疫を入れず、

人の手足の煩ひを除き、

牛馬の

病を

愈すと云々。

8 天拝一光三尊如来縁起

天拝 一光三尊如来縁起

抑下野国高田山の金堂に安置し玉ふ本尊は、信濃国善光寺の如来一体分身

の御仏なり。其由来をたづぬるに、仏在世の昔、天竺毘舍離国の月蓋長者、この子細に

よりて釈迦如来のおしへをかふむり、西方にむかふて一心に阿弥陀如来の御加護を求るに、

即時に三尊大光明をはなちて来現し玉ふ。すなはち、中尊は阿弥陀如来、左右侍立し

玉ふは観音勢至の二菩薩なり。その御かたちを閻浮檀金をもつて範模し奉れり。

それより百済国にわたり玉ひ、つひに我朝にとゞまり、信州にあとをたれ玉ふ。かくのごとく機を
おひ縁にしたがひて、三国にわたり衆生済度まし／＼き。誠に三国無双の靈像、加持神變更に
生身の如來に異なることなし。しかれば、拜礼のともがらは頼に悪趣を超過し、速に報土
得生の真因を成せんこと、曠劫の大慶、何事かこれにしかん。爰に当山安置の來縁は、
人皇八十五代元仁二年の夏、開山聖人五十三歳、下野国高田山を御建立のきざみ、
御夢のうちに不思議の告を得玉へり。ころは同年四月十四日の夜、一人の聖僧來て
曰、師の願すでに満足せり。速に信濃国善光寺に來らば、我身をわけて師にあたへん。
伽藍をたて、吾像を安置し、末代の衆生を引導すべしとのたまひて、西に向て
さり玉ふとおぼへて、夢さめおわんぬ。聖人歡喜なゝめならず、即御弟子の性信房・
順信房供奉して、善光寺におもむき玉ふ。同十九日晨に御着ありき。このとき、寺僧勤
行のみぎりなりしが、各相語て曰、昨夜不思議の靈告をかふむれり。如來梵音を拏て曰、明日
我弟子善信法師來るへし。我身をわけてあたふる処なり。汝等この三尊を善信房
にわたすべしとの仏勅なり。今檀上をみるに、三尊現に在せり。しかれども、善信とは何人
ならんと、同夢の衆僧十有五人物語いまだおはらざるに、聖人參入まし／＼けり。大衆隨喜
のあまり、仏勅にまかせ、かの一光三尊の金像を聖人にたてまつれり。聖人歡喜の涙に
むせび玉ひ、則、笈におさめ、みづから負て歸路におもむき玉ふ、順信・性信これを扶助す。伝聞
の道俗、結縁のために群集し、踵をめぐらすことを得ず。同廿六日高田に歸御まし／＼けり。
いまの本尊閻浮檀金一光三尊の如來これなり。かたじけなくも世々の

天子玉の冠を傾け礼拝なし玉ふ尊像なれば、各宿善深厚のしからしむる処と
歎喜のおもひをなし、参詣恭敬専要なり。

12 摂州布引山瀧勝寺畧縁起

摂州布引山瀧勝寺畧縁起

抑当寺は、仁王四十二代文武天皇の御宇に、役の行者の
開基なり。行者適六甲を經、幽谷に歩行し此瀧に
いたりて、密法を修練し七ヶ月持念ありしかば、山河
草木震動し、一寸三分の焰浮檀金の馬頭觀音の
尊容水上に浮み出玉ひ、靈香四方に薰じ光明山谷に
赫々たり。行者奇異のおもひをなし、則靈木をもとめて、
御たけ一尺三寸の尊像を彫刻し、出現し玉ふ尊像を御
胸中に納め玉ふ。貴哉。三十三身にげんじ、現当二世に
安をあたへ、衆生天災の厄難をはらひ玉ふ。嗚呼悲哉、世の人
しらず、此誓願ある事を。夫本尊出現の淵流は、やまより
落る岩浪のさながら瀑布に異ならず。このゆへに、山を
布引山と号し、寺を瀧勝寺と名づけたり。梢にわたる

峯の雲、巖にむせる蒼ころも、谷の嵐も冷やか也。北は六甲
の山続き、峯峙て谷ふかし。麓に無漏の海をたへ。碧浪
天を浸し、真如の月万里の波濤をてらし、一葉の帰帆
雲中に入るかとうたがはる。東は仏母の靈山につぎて這那
の梢森々たり。まことに信仰の輩、この靈場を踰て現当二世の
願望をいのるに、何ぞ大悲の誓にもれんや。委敷は古縁起に見へたり。

14 石山寺由来畧縁起

石山寺由来畧縁起

夫石光山石山寺は、人皇四十五世 聖武天皇の御願、良弁僧正の開基なり。本尊は二臂の
如意輪觀世音菩薩、御長六寸の金銅の尊像、聖德太子二生の御本尊にて、御代々の
皇帝の御相承ましましける御本尊なり。そのかみ、聖武天皇十六丈の盧舍那仏の像を鑄
造らせ玉ひて、莊嚴の為に黄金を集玉ふ。其時、我朝にいまたこかねまれなるによりて、和州金峯
山は、その地みなこかねなると伝へ聞しめし、良弁僧正に勅して蔵王権現に此事をいのり乞玉ふに、
蔵王権現告てのたまはく、此山のこかねは弥勒仏出世のとき大地に敷べき黄金なり。江州
湖の岸の南に觀音の靈地まします。かしこに行て祈り申すべしと告させたまふにより、此所に
いたり見たまふに、岩の上に釣をたるゝ翁座したまへり。良弁かの翁にむかひ、此所に靈所

ありやと問たまふに、翁答ていはく、此山のうへに大なるいはほあり。紫雲つねに聳へて八葉の蓮花の如し。これ即観音利生の靈地なり。我はまた此地の主、比良の明神なりとて、かきけすごとくにうせたまふ。僧正やがて天皇の御本尊を申請て、此岩の上に安置し、いのり給ふに、いく程なくてみちのくの国金華山にてはじめて黄金を掘出し、朝廷に奉りけり。僧正秘法結願のち、御本尊を納め帰らんとし給ふに、岩の上を更にはなれ給はず。此事を天皇に奏し奉るに、叡信ましめて、先年号を天平勝宝と改元したまひ、東大寺より先たちて当寺を開基し伽藍を建立したまふに、地中より五尺の宝鐸を掘出せり。ますく古仏の聖跡、観音の靈地なる事をする。僧正即一丈六尺の大悲の像を造りて、其御腹内に彼御本尊を籠奉り、左右の脇士、蔵王権現・執金剛神各御長八尺是又安置したまひけり。まことに当寺の建立は天皇の御願成就よりおこりしにより、其後、御代々の帝の行幸、その数をしらず。御即位の御古例としては、必ず御開帳の御事おはします。一天四海の御祈り、往古より今に至る迄やむことなく、累代の勅願所として御帰依他に異なる者をや。亦夫、たとひあらゆる神明仏陀の利生にもれたる者だも、一たひ当寺に帰依せしめは、加護を垂べしといふ御ちかひましますと云々。しかのみならず、本朝に黄金をいだすことは、誠に観音福德の利生によれり。此ゆゑに、貧苦の難をすくひて富栄を与へたまふこと、靈驗数々多し。殊更に女人の所願をみて給ふて、子なき者には子をあたへ、難産の者をすくひたまふ。誠に現世安穩後生善所の御めぐみやむときなし。大慈大悲の御誓ひむなしからず。世にたぐひまれにして、奇特の瑞相、難思の功德を施与したまふこと、其数をしらざる者をや。

(二) 行空白

紫式部は右少弁藤原為時朝臣が女、上東門院の女房にて侍りけるに、一條院の御伯母選子内親王より、めづらしからん物語や侍ると女院申されたりけるを、式部におほせられて作らせられければ、此事をいのり申さんとて、当寺に七ケ日籠り侍けるに、湖のかたはる／＼と見たされて、心もすみてさま／＼の風情まなこにさへきり、心にうかみけるを、とりあへぬほどにて料紙などの用意もなかりければ、大般若の料紙の内陣にあるなるを、心のうちに本尊に申うけて、思あへぬ風情を書つける。彼罪障懺悔のために大般若経を一部書て奉納しける。今に当寺にあり。又、この物かたりを書けるところを源氏の間となづけて、其所かはらず有。かの式部を日本記の局とて、観音の化身とも申つたへ侍る。

15 摂州有馬湯元温泉寺薬師如来畧縁起

摂州有馬湯元温泉寺薬師如来畧縁起

夫当山薬師如来の尊像は、人皇四十五代聖武天皇の御宇、行基菩薩の

開基にして、古より有馬の山中に温泉ありて諸病を治する事、神効余の国の及

所にあらず。是によつて 舒明天皇・孝德天皇有馬山に御幸まし／＼き。然とも路あれ

跡空しきを行基菩薩深く歎き、西嶺の雲を払ひ、猪名の小篠を分行、尋登り給ふ

に、一人の男山中に臥して苦ける。菩薩あやしく問せければ、彼男、我は悪瘡をうけ忍かたし。

この故に、有馬の温泉にこゝろさし是迄登りつるに、山深霧立て路分けかたし。問くる人もなし。うへ

つかれはてゝ、唯命の露の落るを待はかりと哀ければ、菩薩痛ましく思召て、食をあたゑんとありければ、我は宿世の罪にてこそあれ、都て魚のあつものにあらされは、食喉に入らず、と。菩薩いと憐みて、長須の濱と云ふ処に□生魚を求、あつものとなして、彼病者に□菩薩に塩梅をこゝろみて□われと。菩薩いなむに及はず、喰て後、□りける□魚、残る半を昆陽の池に放給へは、忽生て悠々として去りぬ。今も一眼の魚あり。諸人のしる所なり。亦、彼の病者申けるは、我身瘡の病堪かたし。人の舌にて舐れば、痛み暫時止。願は菩薩是をなし給へ、と。菩薩いと憐みて、□たゝれ臭穢しき瘡を舌にて舐給ふ。其時、彼病者忽紫磨金色の仏身となり、光明赫奕たり。菩薩驚て合掌礼拝したまふ。爾時世尊告曰、我は東方瑠璃世界の教主薬師如来なり。衆生済度のため、迹温泉砌に垂て、汝を待こと久し。善哉、温泉の□を□き病者の苦患を救へしと云終りて、空中に入給ふ。菩薩信心肝に銘し、温泉を尋石を刻み薬師の尊像を作り、温泉の底にすへ、亦、如法経を書写し同納。則金色の薬師の尊像を自彫刻し堂中に安置し奉りて、誓願曰、温泉に入る人は現世に除病延命し、当来煩惱のあかを洗、金剛堅固の身となさしめむ、と。是より難病治すること挙数かたし。其後、豊臣太閤秀吉公いまた下賤のころ、此薬師の尊像に立身出世界福を祈り給ふ。果して後來太閤の位に登り、無限靈験を感応ありて、天正十三年に政所をして諸堂造営まじくき。秀吉公常に一所清浄の浴地あらまほしく願ひけるに、慶長二年三月十日、薬師堂の東に新湯沸出たり。不斜悦び給ひ、浴室殿閣を造り、其跡今にあり。去の後は新湯止め。如是諸病悉除出世界福を守り、殊には未来成仏の憐み給ふ事、普知る所なり。委は本縁起を見るへし。

21「播磨明石柿本人丸神社境内盲杖桜図」

昔筑紫に盲人あり。はるく此社に詣て、／

ほのくともこと明石の神ならは／

我にしも見せよ人丸のつか／

かくなんよみければ、たちまちふたつの眼ひらき、始て／物をみる事を得たり。盲人こよのふよろこひて、かゝれば、
／身とたのみてし杖は用なきとて、／広前にさし捨／さりぬ。しかりしに、／其杖より枝葉／生茂りてより、／春毎
に／花咲妙れば、／名付て／盲杖桜／とそいふ。

23「月輪寺時雨桜の図」

時雨桜の図

法然上人、親鸞聖人なかされ／させ給ふ時、殿下兼実公と／手つから植給ふ桜なりければ、桜も御名残をおしみ、露
の／落ること、時雨の如くなれば、しくれの桜と号給ふ。いまに／弥生のころよりふゆまでしくるゝこと、いにしえ
上人御別の／時と替れることなし。是、祖師上人の御徳なるへし。／

春くれはいつもさくらのしくれして／

(イ)
そゑの世までもぬるゝ□かな

24 人丸山船形之梅の記

人丸山船形之梅の記 涸露軒写

抑此舟形の梅と申は、過にし元禄のころ、同州赤穂の／先主浅野長矩の朝臣の忠臣間瀬久太夫正明か秘蔵せし／鉢植の梅なり。国をひらきて立退折から、大石良雄／と同道して、此社頭にまふて、ぬさの為とて此木を／奉納し。往むかしの神詠に、嶋かくれ行舟おしぞ／思ふとてねかひし如く嶋かくれ行の舟の／ことくになりたまひし主君の／御あと、我々か心中なとか／その舟を惜しとおもはさらん／や。然らば我々も神慮と同じ／こゝろなれば、此心をあはれみ玉ひ、／願望叶へさせ玉へ。いよく／叶へさせ／玉ふものならは、此梅、日あらすして舟の／かたちとなれ。もし叶はすんは、忽かれなん／と、心中に祈念し、猶成木の後をおもん／はかりて、神前地狭ければ、爰に植置て／さりしとかや。忠臣の至誠、神も納受します／にや。ふしきなるかな、此梅、日あらすして大木舟／のかたちとなりぬ。それより数の星霜をふると／いへとも、猶年々に枝葉榮て、其かみ舟おしそ／おもふとつらね玉ひし嶋かくれたる舟を、今爰にみ／るかとし。花は薄紅梅。花一ふさに八ツつゝ実のるゆへ、／八房の梅と名つく。はるのころ諸国参詣詩哥の／雅衆、群集いふはかりなし。されは、神徳のありかたき忠臣／の至成、後世のしりかたからん事をおしはかりて、／図画をなし、梓にちりはめて、世中に／のこす事はかり。

舟形の梅をよめる

おしそとの歌に／ひかれてその舟のすかた／あらはす庭の梅かえ

享保十八年癸丑春二月

赤石人丸山／月照寺

32 高砂社相生松畧記

高砂社相生松畧記

高砂の名はひろ こん 古今に亘りて世にいちじるし。皇国其みくに 靈区れいく を仰あふ ぎ。
唐土其もろこし 称号しやうかう をしたふ。古今の文人此地を称して吟料きんれう とし。本朝の賀宴かえん
此地を以てことぶく事こと 世こぞ 挙こぞ 知所也○当社はおほなむら 大己貴命ののみこと を祭まつ れりしを
後に素戔鳴尊すさのをのみこと 稲田姫いなだひめ を合祭あはせ りて三座とす。或時祥瑞しやうずめ 有あ りて神殿の
かたはらに。一夜に一木の松生出。根ひとつにして雌雄めを 左右にわかれ
枝葉茂せうは れり。又尉姥ぜうば のふたはしらのかみ 二神此松の本に現れ給ひて。我は是伊弉諾いさな
伊弉冉いさなみ の神也。我今より神靈みたま を此所に留て。永く夫婦妹背いもせ の道を
守らんと告給つげ ひて。たちまち神隠かみかく れましく き。此二神は神代に
天神あまつかみ のみこと 勅みこと のまにく。礮馭おのころし 慮嶋あもり に天降あもり まして。始て遘合みとのまきはひ 為夫婦。
大八洲おほやしま 国及諸おほやしまのくにまたもろこ の神等かみたち を生給ひて。夫婦の道を始め給ひし。御神
にして。当世婚姻いまのよこいん の礼に用ゆる。嶋台だい 台だい 名は礮馭慮嶋に始り。又
相生松。尉姥みかた の御像みかた を作るは。即伊弉諾伊弉冉尊すなはち にして。当社を
本とす。相生の松の如く相共にかはらぬ操みさを を。夫婦妹背のためしと

するも諾うべならずや。上に所謂いはゆる雌雄相生松といふは。大サ五尋余ひろにして
其枝連理れんりとなれり。緑みどりのいろ。地に敷ひとへて偏りうつやに龍蛇りゅうじやのわたかまれるに似て
二十余丈有しとなん。かゝる靈樹れいじゆたりといへ共世の乱こはいかにせむ。天正の頃
豊臣秀吉公別所長治公と戦たたかひ給ひし時、毛利輝元てるもとの一族赤石浦より
此所迄充満じゆうまんせり。長治没落ぼつらくの時。いかなることにか有けん。毛利家の臣
何某なにかし。此松を伐きりて簣かへりとす。かゝる靈樹を心なく伐し故に神の御崇とくめを蒙かうふり
身死みまかりしとは世人あまねく遍知みまかり所也。今我家に靈樹の残れるあり。是文理滑沢ふんりくわつたく
沈水香ちんすいかうのごとし見んことを願ひとふ者は問ふへし。今宮祠みやでの東方にあるは
古への相生の松の実はえ也

猶委しき事は方冊にあり是は其あらましを記して

行人旅客の需に応するのみ

33 播州高砂尾上相生古松之由来

39 高砂尾上相生古松之由来

播州高砂尾上相生古松之由来
ばんしゅうたかさおのえあいをいこせうのゆらい

高砂尾上相生古松之由来

抑当社は唯一の神廟なり。往昔
そくとうしや、ゆい、しんべう、むかし
人皇十五代神功皇后神託に依て
にんわう、じんぐうこうごうしんたく、より
三韓御征伐あり。御凱陣ごかいじんのとき、

抑当社は唯一の神廟なり。往昔
人皇十五代神功皇后神託に依て
三韓御征伐あり。御凱陣のとき、

住吉大明神形をあらはし玉ひ、あまの小船にめされ、同じく此淵崎に着せ給ふ。そのとき、諸神相群集哥舞を奏し給ひ、猶御契のしるしとして松の実二粒を植置、ちかひをなし玉へは、一夜のほどにさかへて大樹となし、連理の枝を生ず。是則赤繩の神と崇め奉る。いはれ奉る事、社伝に有之。其後、人皇六十代醍醐天皇延喜三年の春、肥後国阿蘇宮神主友成上洛の時、このところにいたり相生の松をたづぬるに、いづくともなく老人夫婦来り、相生の松の由来くわしく物語あり。いかなる人そと尋れば、こたへて曰、尉は津の国住吉の者、是なる姥こそ此所の人なれ。夫婦すでに七百歳を経たりといふと忽然と見へず。友成奇異渴仰の思ひをなして、其跡を敬

住吉大明神形をあらはし玉ひ、あまの小船にめされ、同じく此淵崎に着せ給ふ。そのとき、諸神相群集哥舞を奏し給ひ、猶御契のしるしとして松の実二粒を植置、ちかひをなし玉へは、一夜のほどにさかへて大樹となり、連理の枝を生ず。是則赤繩の神と崇め奉る。いはれ奉る事、社伝に有之。其後、人皇六十代醍醐天皇延喜三年の春、肥後国阿蘇宮神主友成上洛の時、このところにいたり相生の松をたづぬるに、いづくともなく老人夫婦来り、相生の松の由来くわしく物語あり。いかなる人そと尋れば、こたへて曰、尉は津の国住吉の者、是なる姥こそ此所の人なれ。夫婦すでに七百歳を経たりといふと忽然と見へず。友成奇異渴仰の思ひをなして、其跡を敬

しんて神明しんめいをはいす。今の宮居みやゐ是也。
事ことおわりて、友成ともなり今津いまつの崎さきより出船しゅつせんの時とき、明神めうじん船中せんちゆうに現形けんけいし給て、海上かい船中災難ちゆうさいなんをはらひ、風波ふうはをしつめ
守り神もりかみとならんと、神託しんたくありしに
依よつて而、此御神おんかみを船魂ふなたまといはひ奉る事、
くわしく社伝しゃでんに有之。古の松は、太閤たいかう
秀吉公ひでよしこう三木城きしやうを攻し時、軍兵切取し
より立かれとなり、今の松はその
実ばえなり。

しんて神明をはいす。今の宮居是也。
事おわりて、友成今津の崎より出船の時、明神船中に現形し給て、海上船中災難をはらひ、風波をしつめ
守り神とならんと神託ありしに
依而、此御神を船魂といはひ奉る事、
くわしく社伝に有之。古の松は、太閤
秀吉公三木城攻の時、軍兵切取し
より立かれとなり、今の松三代目
相生の松なり。

38 高砂尾上神社相生靈松真図

高砂尾上神社相生靈松真図

此松は当社境内にあり。雌雄の／両種一根より生し、枝葉繁／茂して、一丈はかりのほとより／両幹に分れ、其幹の雄と見／ゆるもの、其葉は雌なり。其／幹の雌と見ゆるかたの葉／は雄なり。互に性をかへ／たるものゝ如し。豈／奇ならずや。／即ちこれを／称して、／日本瑞／一三代目／相生の松と／いふ。但し、いにしへの／枯木は質かたく、／今や化石となりて、社／務所に蔵せり。

42 播磨国曾禰靈松の由来

播磨国曾禰靈松の由来

掛まくも賢き天満天神の栽へ置き給ひし、播磨なる曾禰の神松の、千とせの後も限りしられぬまで弥栄えに栄え、霊にくすしき由来を尋ぬるに、そのかみ延喜の御代に、菅丞相と申すおはしけり。藤原時平等の潜翫によりて築紫に左遷せられ給ひける途すから、播磨の国印南郡伊保の港に御船つきけり。日笠山にて御詠あり。

おとゝめのくるみのからにたまされてひかさの浦をめくる山から

さて、四方を眺め給ひけるに、東は明石の迫門より北方高砂尾上の鐘もあらしのさはきちかく、西は室津の沖までも見えわたり、四国の山もほの見えて、ゆきかふ船はさながら胡蝶の如く、無双の風景いはむ方なし。菅公感に堪へ給はず、御手つから小松を植ゑ給うて、我が罪なくは栄えよとのたまひけり。果せる哉、むしつの罪も消え、菅公の御徳は日々にいちしるく、終に正一位天満天神と崇められ給ひ、彼の海辺に植ゑおかせ給ひける小松も、ほともなく繁茂しけり。されは、ある人、天神のいや栄なる御威徳を感じ御社を営み奉りけるか、やかて産土神とあかめられ給ひ、四季の祭礼やむ時なし。さて、御手植の松はいよくはひこり、天正の頃には、幹の太さ壹丈八尺、

高さ壹丈、夫より杪まで壹丈三尺、戌亥の枝は八間斗、南の枝は是も八間余りはひこりて、中にも西の方の一枝は十間余りはひこり、其下蔭は露ももらさずしけりあひけり。秀吉公の御時、社頭兵火の災にかゝりける時、西北の枝は皆焼け、其いたみにて次の枝三四本も枯れにしかと、又はひこりて天正の前にもこえ、未申より丑寅へは廿間余り、戌亥辰巳へは十間斗りとなり、其の樹の様は奇異にして、幹はさながら龍蛇の蟠る如く、枝葉は地を離るゝ三四尺にして虎豹のかけるか如し。画工の筆にも及ひかたくそ見えたりし。さらに、天明三年の春の頃、丑寅の大枝にいたみつき、同五年の秋、その枝終に枯れけり。其後、幹より辰巳の枝も精氣漸くうすくなりけるか、惜い哉、寛政十年の秋、靈松終ニ全く枯れ果てたり。かゝる靈松にしあれば、ところの人永く世々に残し示さむとて、狭殿を造りて之を齋祭りぬ。しかるに、此老樹の未だ枯れさる前、天明元年の春、其樹のもとに自ら実生の樹いて来て、生たつこともいと早く、爰に、明治廿八年まで百十年余りニして既に千とせを経たる姿となり、太さ三圍にあまり、高さ三丈斗り、未申の方より丑寅の方へは廿間、西東は十七間の間に枝葉茂り合へり。此、まさしく天神の愛て護り給ひし松にこそあれ。殊に天神の御誓をこめ給ひし事なれば、幾千代の後までも御神の誠を示さんとや、親樹のまゝのふりをあらはせり。稜威の験、世にも稀なりといふへし。かゝれば、これより後の世にも尚いかばかりに榮え行かむと、今をめて行末を寿き、此松のもとにまゐ来む諸人はいふも更なり、遠き国々の人々にも告げて、此神松の幸にあはしめんと絵に写し梓にちりはめ、世に伝ふるになん。

48 播磨国石宝殿畧記

播磨国石宝殿畧記

はりまのくにいなりまほりおしのやしろ
 播磨国印南郡生石社は、昔、大穴牟遲神・少名毘古那神、天津神の勅を受給ひて、国造営坐し時、此所にかり宮を造りしは坐けるに、二神議り給ひて、一夜の内に石御殿を造り、其石屑を壱里北なる高御位山に捨て給ひぬ。然れども、未造営竟給はすして夜明にける。折しも天佐久売二神に、今此山の麓に軍を起させ給ひぬ。しかとも、二神此言を聞食て、麓の里に出坐て、神等を集へ給ひ、其所を神諸ト云／さむと謀れる阿賀神と云神ありと奏せり。此二神は、人は更なり、牛馬の病をも療し、諸の災を彼阿賀神を平け、終に天／下を造営竟給ひぬ。此二神は、人は更なり、牛馬の病をも療し、諸の災を攘む為に、禁厭治法を定め給ひしまゝに、今も尚医師の道と禁厭の術とを掌り給ひて、いとも尊き大神に坐事、世人皆知所也。／將この御社は、往昔欽明天皇十三年正月申の日、二神人に着りて曰、此所に御社を造営齋きまつらは、福てむと神勅有しにより、造営仕奉りて、平津莊・伊保莊の鎮守と崇奉りしかは、其年より九月申の日を取て、御祭り仕ふることゝなりぬ。厥后、孝德天皇御宇白雉五年、天皇の御夢に奇霊なる御告有しによりて、千石の地を寄附し給ひしか、世の乱ことに其地を失ひて、終に天正の頃迄に皆無なりぬ。されは、霊場／は田畑の字にのみ残り。然はあれども、神の御功德は弥増に弥栄えて、／尊き恩頼を受るもの数をしらす。かゝる尊き御社なるを、只名所／古跡とのみ心うる人も有よしなり。其名所古迹こそ止事無尊き事は有けれ。実に石御殿は神代の姿其俛にて、棟は西にかたふき、上には靈／木靈草生榮えたり。廻りの水は増事なく減事なし。只、潮に従ひて、／日毎に満干のかたちと成せり。人々詣て、其奇しく妙なること

を知給。しりたま／へ猶事長ければ、是に畧す。なほことなか委しきは本記を見給ふべし。こゝりやく

50 臥龍松之図

臥龍松之図

千種御殿／正三位有功／雲のうへに／きこえ／あまてそ／大内の／きくにも／たかき／松のほま／れを／

臥龍松在_二于備前和気郡／大内村一井氏庭中一幹／九岐千枝争重万朶競横／□有_一虬龍蟠臥之状曰其／祖松翁所植既
經_二一百余／年_一今改度_レ之樹高凡二丈／二尺根囲凡一丈枝朶之／具_二三石_一凡十八丈空前後凡／十二丈而偃蓋大小其大／者
上可_三以展_二二十余広_一云／偃榮至_レ此可_レ謂_レ奇矣嗟示／由_二其培養之得_一法哉／

嘉永庚戌秋九月／香門篤識印印／松翁四世之孫一井惟正改刻

53 「高野山両部曼荼羅由来」

高野山は_二両部曼荼_一の靈場。りやぶまんだ弘法大師禪定の勝地なり。れいぢやう

ありがたき由来。不思議の因縁。具に記しがたし。是により

宗々の祖師。諸山の先徳歩を運び。代々の天子。世々の將軍。

信を寄せ玉ふ。大名高家百姓町人。貴となく賤となく。日牌月

牌を立。先祖の菩提を願ひ。子孫の繁昌を祈る。或は塔婆を

書て一類の廻向をなし。經木を納て眷属の結縁を求む。何宗
何国となく。或は講を結で施入し。又は職を励て志を達す。
当山を諸宗の惣菩提所と仰ぐ。誠に其謂れある哉。其志
の次第に重々あり。

○大日牌

金貳拾兩

○並日牌

金貳兩

○小日牌

金壹兩

右は日々供膳法施あり

○月牌

金壹步百文

右は月々供膳法施あり

右日月牌は毎歲盆供養の節。一人宛別々に戒名を經木に書き。
開眼供養す七日七夜の不斷經寺々の法事皆此ためなり

○茶牌

貳朱四拾八文

右は永々茶湯し廻向す

○塔婆志の次第 三百三拾文 貳百貳拾文 百拾文 五拾五文

右塔婆經木共に奥院へ納め廻向す

右惣施入惣廻向塔婆盆彼岸相立。法事執行す。参詣の人々施入の

様子を知らず。国へ帰り後悔する者多きよし。依て其様子を知らせすゝむる也

54 「源長寺由来」

抑当山の御本尊の由来は、天照太神宮の御本地国府の弥陀、試の尊像と称し、人皇四十五代聖武天皇、行基菩薩に勅定ありての玉ふ様は、太神宮は我御先祖、日本の宗廟なれば、神明の本地をあらため、我に拝ませよとの抑により、行基菩薩、太神宮の社壇に於て七日の参籠し、何卒神明の御本地を知らせ玉へと念願を擬し玉へは、神明感応ありて告ての玉はく、
実相真如の日輪は生死長夜の闇を照し、本有常住の月輪は无明煩惱の雲を払ふと御託宣まし、汝しらずや、
吾本地は西方の弥陀如来なりと告玉ふ。行基菩薩、霊夢の通り天子へ奏問し玉ふに、聖武天皇弥く御満悦まし、
夫より本地の弥陀を彫めとの勅定ありけるに、行基菩薩、伊勢国府の里に於て本地の尊像を彫刻せんと思召すに、太神宮、尾首羯摩と姿を変し、一日一夜に三体の尊像を刻まれる。夫より国府の里に一字を建立して、太平山无量寿寺

と号し、三体の尊像を崇敬きやうして、太神宮の御本地と抑れ
奉りける。其後、人皇九十九代光こ□院いんの御宇に、三体の内一体を
当山へ授与しよよし玉ひて、无量山長明寺と号す。中故改号ありて、
源長寺と称しける。

勢州三重郡宿野

无量山□印